



第22回

アスリートを支える義肢

臼井 二美男

usui fumio

2013年の日本スポーツ界最大のトピックは、「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の招致成功」に集約されるかもしれない。9月7日の第125次IOC（国際オリンピック委員会）総会の映像を緊張しながら見守っていた人は多いことだろう。イスタンブール、東京、マドリードによる招致レースは、最後のプレゼンテーションがカギを握るとも言われていた。

おそろいのネイビーのジャケットとクレリックシャツ、グレーのパンツに身を包んだ東京招致委員会のプレゼンの先陣を切ったのが、パラリンピアン佐藤真海さんだ。その笑顔は一瞬にして世界中の人々の心を魅きつけた。招致成功に大きく貢献したそんな佐藤さんの右足の膝下をしっかりと支えていたのは、義足だった。

今回のゲストである臼井二美男さんは、義足や義肢等の製作・調整をする義肢装具士だ。臼井さんが義肢装具士を志したきっかけ、仕事の内容、佐藤真海さんとの出会い、障害者スポーツと2020年東京パラリンピックへの思いなどについて伺った。

聞き手／西田善夫 文／山本尚子 構成・写真／フォート・キシモト

爽やかな笑顔での 招致プレゼンテーション

— 佐藤真海さんが笑顔でプレゼンテーションを始めたとき、彼女が義足であることに気づきませんでした。

あ、そうですか。「この女性は誰だろう？」と思った人も多かったのでしょうか。僕は障害者のスポーツ大会で山口県にいたのですが、彼女は障害を持ったアスリートの代表なのだから見ないわけにはいかないとテレビ前で待ち構えていました。そうしたら、一番手が出てきて驚きました。病気と震災についてジェスチャーも交えて、スポーツに関わったことで幸せを得られたといったわかりやすい内容でしたね。

— 爽やかで、これは大したスピーチだと思いました。チームとしてのいい流れができましたし、日本はこれから当面、大丈夫だなと安堵感を得ました。

彼女は、2004年アテネ大会、2008年北京大会、2012年ロンドン大会と3大会連続でパラリンピックに出場しているのですが、彼女の活躍を見て、「私もスポーツしたい」「私も走ってみたい」という女性が一挙に増えてきましたね。

— そうですか、励ましになっているんですね。



IOC総会、佐藤真海さんプレゼンテーション

鈴木徹さん、 佐藤真海さんとの出会い 「できれば義足で走りたい」

1999年に鈴木徹さんと出会ったのがアスリートに義足を提供するきっかけとなり、鈴木選手は2000年のシドニー大会から走高跳でパラリンピックに出場しています。北京大会では日本選手団の旗手も務めました。

佐藤真海さんが私のところに訪ねてきたのは11年ほど前、2003年の春です。チアリーダーをしている21歳の女子大生でした。右足に痛みを覚えて病院に行ったら骨肉腫と言われ、進行していたので膝下を切断して義足を装用するようになったのです。

義足があまり合わず、歩きづらくて痛い。でも義足とはそういうものだと思っていたようです。東京都の障害者総合スポーツセンターで義足を外して泳いだら痛みがなくて爽快だったと。そんなときに、センターで顔見知りになった人に「真海ちゃんなら合う義足をつくれれば走れるよ」と助言され、私のところに来たそうです。



北京パラリンピック、鈴木徹選手

— 初めて会ったときはどんな様子でしたか。

片手で杖をつき体を斜めに傾けるようにして歩いていましたね。ソケットと呼ばれる装着部がゆるんでいたし、義足が合っていないことはひと目でわかりました。「普通に歩ける義足をつくってほしい。できれば義足で走ってみたい」という相談でした。話し方は今とほとんど同じで、悲愴感はなく、芯が強く自分の気持ちをしっかり伝えられる子だなという印象でした。

— それがIOC総会でのメッセージの根底にあったものですね。

はい、出会いから10年、学問をしっかり修め、就職をして、大学院にも行って、いろいろな経験をしましたしね。

— 東日本大震災の被害にも遭っているということでしたね。

宮城県の気仙沼出身ですからね。実家が津浪で流され、1週間ほどご家族と連絡がとれずに不安な日々を過ごしていたようです。幸いご家族は無事でしたが、家のほうはまだそのままのようですし、その間の彼女の心境を考えるとね。

— それほどの苦難を乗り越えてきているのですね。彼女は気丈なんですか。

あれほどの気丈さを持ち合わせている子はそういないかもしれませんが。自分で目標を立てたことをきちんと実行に移すことができる人です。かつて入院していた病院に小児病棟のセクションがあるのですが、定期的に通って自分の話をしたり精神面のケアをしたりという活動もしています。

28歳で職業訓練校の「義肢科」に興味を持つ

— ところで、臼井さんはどんなきっかけでこのお仕事に就かれたのですか。

アルバイトで人生経験を積んで自分の適職を探すつもりだったんですが、そのアルバイトで忙しくなり、大学を3年で中退しました。それ以降、ガードマン、バーテン、露天商、コンサートの企画、運転手など、28歳までいろいろやりました。これだという仕事になかなか出会えないまま、結婚を考え、手に職をつけたいと思うようになりました。ハローワーク(当時は職業安定所)に通い出したときに、職業訓練校で「義肢科」という文字を見つけたのです。

— “義肢”にはもともと興味があったのですか。

その言葉は知りませんでしたが、おそらく義足の製作を教える科目なんだろうと想像しました。そのとき、小学校6年のときの担任の先生の記憶がフラッシュバックしたんです。大学を卒業したばかりの女の先生でした。夏ごろ「申し訳ないのですが、足の病気で入院することになりました」と言って僕たちの前から姿を消し、次に現れたのは卒業式の間際でした。



臼井二美男氏

— 長期入院されていたのでしょうか。

そうですね。教室に杖をついて来て、「私は骨肉腫という病気で左足を大腿部から切断して今は義足を履いています」と説明してくれました。僕たちはその後すぐ卒業してしまったので、「足を切断する」というのがどういうことかそれ以上聞くこともできませんでしたが、パンタロンの上から義足を触らせてもらった感触は覚えています。「先生は痛い思いをしたのだな」ということだけは伝わってきましたね。

— その思い出がよみがえった？

はい。12歳から28歳までの16年間は義足のことなど考えたこともなかったのに、ふいに思い出して、義足の学校に行こうと決めました。

鉄道弘済会に採用され「義肢装具士」となる

— 学校はどうでしたか。

いや、結局行かなかったんですよ。あまりに未知の世界なので、入学前に少し現場を見ておこうと思い、今の職場である鉄道弘済会に見学に行ったのです。そうしたら「今、ちょうど欠員があるからよかったら見習いで来ないか」と誘っていただいて、半年後には正社員になって今に至っています。現在は「義肢装具士」は国家資格ですが、当時はそうではなく、僕が入って5年後に国家資格となり、「実務経験5年以上」の受験資格をちょうど満たして……。

— 運命めいたものを感じますね。なぜ鉄道弘済会が義肢装具なのか、というところをお聞きしたいのですが。

以前、JRは国鉄でしたよね。国鉄の電車の連結や線路作業の事故で手足を失う人や亡くなる人が多く、遺された奥さんの職場として駅のホームに売店キヨスク (KIOSK) が設置されました。財団法人鉄道弘済会では、キヨスクを全国規模で展開し、かつ福祉事業として、義肢製作所、知的障害者の施設、保育所もやっていました。それが国鉄民営化になる際に分割され、キヨスクは東日本キヨス

ク、西日本キヨスク、九州キヨスク等に分かれ、福祉事業の部分が財団に残ったのです。義肢製作所は、義肢製作から装着訓練までを一貫して行う施設として、一般の人も多く受け入れています。

— 今は全国に何カ所あるのですか。

昔は12カ所にありましたが、今は東京1カ所です。



村上選手と義足打ち合わせ

はじめはひたすら仕上げの工程を担当

— 職業訓練校に通うことなくいきなりの義肢製作修業。大変ではなかったですか。

中学生のときは美術部にいたのものでものづくり自体は嫌いではありませんでした。でもゼロからのスタートですから、丁稚奉公というか徒弟制度のようなものでしたね。最初の3年間は最後の仕上げだけをやらされました。今であればオールラウンドな人材を育成したいので、早いうちからいろいろやらせますけどね。

— 4年目からは？

下腿義足といって、膝から下の義足をトータルでやらせてもらえるようになりました。そのあとは大腿義足といって、要は足1本分の義足というようにスキルアップしていきました。とにかく先輩方に言われたことを忠実にこなし、手伝い、絶対に逃げ出さないということだけでした。

— 逃げ出したくなるようなことは何かあったのですか。

うーん、義足をつくっていると、いろいろな方がいます。若いころ、「義足が合わない」とバーンと投げつけられたことがあります。そのときはショックで、その人を恨みそうになりました。でもよく考えれば、義足になった時点でつらい思いをしているのに、合わない義足は性格が変わってしまうほど痛みを伴うのです。四六時中、痛みを感じていれば、人を許そうとか寛容な気持ちでいられるわけがありません。それならば使用者が「良い」と言ってくれるような義足をつくるしかないと思ってきましたね。

「わざと合わないようにつくっているんだよ」

— 臼井さんがつくった義足の使用者と、その後も交流はありますか。

まめに連絡を取り合っていますよ。「わざと合わないようにつくっているんだ」なんてよく冗談を言うんです。

— ほう、その意味は？

「あまりピッタリとフィットするものをつくると、それきり会えなくなってしまうから、ちょっと手を抜いてたまに来てもらえるようにしているんだよ」と。実際、わざとではないんですが、後の調整は必要なんです。人間の体は敏感に反応して変化するので、義足も少しずつ合わなくなるんです。ですから皆さんには定期的に来ていただきます。あとはメールで、「1泊2日で富士山に行ってきました！」なんてうれしい連絡をもらいます。そんなメールが毎日20通は来ていますね。



義肢装具調整中

— ああ、それは、臼井さんにとっても励みになるでしょうね。切断の場合、完治はないわけですから、少しずつ先を読んで次の変化に備えなければいけないのですね。

まあ、切断したらもう生えてはきませんから。でも本人が他人の責任にしたり依存する気持ちがなくなったときから、その人はもう立派に自立していて、障害者とは言えないと思うんですよ。車いすも義足も、靴やドレスと同じ感覚なんです。

そうなる人って不思議なもので、自然に別の人の面倒を見るようになるんです。体の傷は治らないけれども、心は健やか。そういう人はたくさんいますし、今後も増やしていく手助けをしていきたいと思っています。

— ああ、いい言葉だな。人を思いやる気持ちですよ。

はい、健常者の人でも高齢になって体が思うように動かなくなる人はいるはずですよ。もし自分があんならどうするか。トイレは？ お風呂は？ 段差などのバリアは？ 「おもいやり」が流行語になっていますが、日本は今以上に、そういう想像力を豊かに巡らせることのできる風通しのいい国になってほしいと思います。

「義足で走るなんてとんでもない」ことに疑問を抱く

— 日常生活で「歩く」ための義足と、スポーツをする際の「走る」ための義足では違いがあるのでしょうか。スポーツ用義足があるとしたら、その取り組みはいつごろから？

「義足で走るなんてとんでもない」という時代があったんですよ。普通は歩けるようになった時点で退院ですわね。ですから、1989年ごろでしたか、大腿義足をつけた海外のトライアスロンのアスリートの映像を見て衝撃を受けました。

— 義足のどこが違うのですか。

まず重さ、これは素材の問題ですね。そして耐久性と膝の継ぎ手の性能です。

— どのように対応していったのでしょうか。

大腿義足に焦点を絞って研究費を申請しました。それから鉄道弘済会の東京身体障害者福祉センターに来ている人の中から、「走る」ことに挑戦してくれる大腿切断の障害者を見付けてあとは根気よく、でした。技術面だけでなく、義足使用者に動作のコツを伝えて不安を解消することも課題の一つでしたね。

— 不安は、練習することで解消していったのでしょうか。

海外で実用化されたばかりの「板バネ」を導入して、センターの廊下、近くの公園、東京の王子にある東京都障害者総合スポーツセンターなどで練習会を開催しました。次第にその参加人数が増え、1991年ごろから定期的な練習会になっていったのです。

— それが切断障害者のための陸上クラブ「ヘルス・エンジェルス」ですね。

スポーツはリハビリテーションの範ちゅう外

— 義足で歩く難しさについて、少し詳しく教えてください。今はアスリートとして活躍する佐藤真海さんも最初は義足に問題を抱えていたということでした。たいていの場合、義足で歩くだけでも大変ということですか。

足を切断する原因はいろいろあります。今は糖尿病の方が多のですが、後は交通事故や腫瘍もあります。最初は学校や職場に戻るべく社会復帰のために「歩くこと」が目標になります。そのためにリハビリをしますが、はじめのうちは筋肉が落ちているので歩くだけでも大変なんですよ。

— 義足をつけた足で第一歩を踏みだすことを目標にしている人にとっては、スポーツどころではないのですよね。

そうです。基本はできるだけ早く家族の元に帰り、仕事に復帰して、生計を立てることが大きな目標ですからね。そ

れだけでも相当の努力と時間がかかるのです。

走るのはまた次の段階で、どんなに高価な部品を用いた義足を使用しても決してすぐにはできません。原動力になるのはその人が持っている身体能力です。リハビリが終わったあとも体を鍛えて筋力をつける努力をし、操作方法やコツを覚えてといったスキルが必要になります。

— なるほど。歩くところまではリハビリテーション、その先はリハビリの範囲を超えてしまうということでしょうか。

リハビリの段階では、専門の理学療法士が歩くトレーニングをして、僕たちが義肢をつくる。両輪というか、双方で調整しながら指導していきます。そのなかではスポーツ動作はしないんです。例えば病院で仮にケガをして入院が長引くと、責任問題にも発展しかねませんから。でもスポーツ動作をすることが可能な人には、そのプログラムを入れ込むこともこれからは必要になるでしょうね。アメリカには既にあるんですよ。

— 障害を負っている方にとってスポーツの持つ影響力は大きいのですね。

もちろんです。ただ病気や障害を持った人たちは、どこか自分であきらめてしまう部分があるんです。肉体だけでなく心にも大きなダメージを背負っていますから。

残存している足の機能をかえて痛めて障害を増やす不安もあるでしょうし。そこをきちんと配慮してサポートすれば、スポーツによって心身ともに大きな効果が得られ、前へ進むことができるのです。



大会にて



ヘルスエンジェルス仲間と

切断障害者の陸上クラブ 「ヘルス・エンジェルス」

— 臼井さんご自身のスポーツ歴は？

中学のときに卓球をやっていたぐらいで、陸上の経験はなかったんです。「ヘルス・エンジェルス」ではそんな僕が組織の代表者で、ロコミで集まってきた寄り合いといった感じでやっています。

— ロコミですか。

親御さんや本人が聞きつけて来るわけです。小学生で腫瘍を発症して切断を余儀なくされた方の親御さんが、運動することで免疫力が上がるのではないかと。スポーツという新たな目標を持つことで転移を回避できるのではないかなど、藁をもつかむ気持ちでいろいろ調べて来られます。あとは年配の方で、30年間一度も走ったことがないから是非やってみたくて来られる方も、みんな仲間に入れてしまいます。

— 今、人数はどれぐらいですか。

最初は5人でスタートして、今、下は小学校3年生から上は72歳ぐらいまで。先週、練習をしたときは64人いました。

— うわあ。

北海道など全国から来られて、もう名前を覚えられないほどになってしまって結構大変です。でも面白いですよ。年配の方は年齢差をあまり気にしないようです。年配の人は若い人に教え、若い人は教えられる喜び、また自分がだれかに教える喜びを知って、うまい具合に和気あいあいとした雰囲気が醸成されていくんですね。おそらくそれは「もう足がない」という共通項があるからこそかもしれません。

— 佐藤真海さんもヘルス・エンジェルを見学に来たそうですが、出会ったとき、何かインスピレーションめいたものはありましたか？

ありましたね。ヘルス・エンジェルスで躍動している参加者と接していると、命の輝きを実感するんですね。佐藤真海は腫瘍を切断してもなお転移への恐怖を抱えていたはずで、「命懸け」のその覚悟には深みがあります。

— しかしヘルス・エンジェルの活動もあと、臼井さんは休日返上なのですね。

まあ、忙しくしています。

— 義肢をつくる方というのは遅しくてごついイメージがありました。こうしてお話をしていると臼井さんは穏やかな方ですね。怒ることなんてあるのですか。

それで困っているところはあります。職場で若い人をどんどん育てなければいけないのですが、僕はあまり怒れない。どちらかというとい心伝心タイプです。それで何とかなればいいと思うのですが、はっきり言わないと伝わらない人もいるので難しいですね。まあ、時間をかけて伝えればいいかなとは思っています。

義足で世界記録を塗り替えられるか

— 一つお聞きしたいと思っていたのは、義足のアスリートが健常者の記録を超えることは可能なのでしょうか。



ロンドンパラリンピック、ピストリウス選手

ええと、不可能だと思います。例えばある学校で一番足の速い子がいて、その子を義足の子が追い越すことはできるかもしれませんが。でも世界記録のレベルで、ウサイン・ボルト（ジャマイカ）の100メートル9秒6といった記録を義足のアスリートが抜くことはないでしょうね。電気やモーターを使えば別ですよ。義足の場合は原動力は残さ

れた足なので、それ以上のパワーは出ないはず。2012年のロンドンオリンピック陸上男子400メートルで、オスカー・ピストリウス選手（南アフリカ）は準決勝で敗れました。義足のスプリンターとして健常者と渡り合っただけでも、あれ以上にはなれないだろうということです。

「SAMURAI」 という名の義足

— きょうは義足をお持ちいただきました。

これは佐藤真海が履いているのと同様タイプです。生活用と走る用があります。“断端”といいますが、彼女は膝下10センチほどが残っています。走る用はバネ状で、体重をかけるとバネがぐっと沈み、そのたわみの反力で前に振り出すのです。



義足

— 板が強いバネになっているのですね。

はい、歩くだけなら膝下の筋力だけでいいのですが、走る場合は筋力が少ないのでその力だけで振ると限度があって疲れてしまうんです。ましてや全力疾走となると、使うエネルギーはものすごいですからね。

僕はよく“板バネ”と呼びますが、正式には“足部”と呼びます。カーボンファイバー製です。

— そうとう体重をかけないとたわまないでしょう。

その人の体重に合わせて、厚みを変えます。体重50キロの人は6番、体重70キロの人は8番といったように厚みを変えて硬めにとかね。

それから、「SAMURAI」という名の義足があるんですよ。

— ほう。

海外の選手はドイツ製など外国製の義足を履いています。そこで4年前、日本製のものをとロンドンパラリンピックに向けて支援基金をいただいて、愛知県の会社と共同開発しました。約20人の若いアスリートにフィールドでテストしてもらい、ロンドン大会に2選手が出場しました。こういう支援基金があると、選手の育成につながりますね。

— すごいですね。チャンスがあれば世界で活躍できる有望選手は多くいるのですか。

います。熱い魂を持った若い子は必ずいます。いい器具とチャンスを与えると、こちらの想像以上に躍進してくれるんです。そういう人材を見出して、相談されたときにすぐ応えられる力を備えておきたいと思っています。義肢だけでなく車いすも含めて、彼らの「チャレンジしたい」という意欲を引き伸ばす機会をもっと増やしていきたいですね。

義肢・装具の品目は多い

— “義肢” というのですから、義足のほかに義手もあるのですね。スポーツ義手もありますか。

はい、特殊ですがあります。例えば片手がないと100メートル走などでスタートの姿勢がとれないので、そのためだけの義手をつくります。ロンドンパラリンピックで実際に走ったアスリートがいます。

あとはやはり片手がないと、左右差が出るので体幹がぶれて走りづらい。そこでバランスがよくなるような義手の研究もしています。

— 多岐にわたっているんですね。

最近はいろいろなことにチャレンジする人が増えているので、それに対応して、自転車用の義足、トライアスロン用、ボート用、ヨット用などを手がけています。

— 装具にはどんなものがありますか。

コルセットや脱臼したときに着けるサポーター、扁平足や外反母趾の人用のインソール（中敷き）、スポーツ選手が着ける膝の装具、サポーター。車いす、杖もそうですし、体につける補助具は全部、装具になります。品目としては何百種類にものぼります。様々なタイプがあり、ケース・バイ・ケースで医師の指示の下に製作するのです。



ロンドンパラリンピック義手の選手

スポーツ用義肢の開発は選手と密にコミュニケーションをとりながら

— もうすぐソチ冬季オリンピックです。ウィンタースポーツ用の義肢もありますか。

あります。クロスカントリースキー用をつくったことがあります。大腿義足でしたが、クロスカントリーの動作として膝が曲がった状態で滑り続けるので、膝の角度を任意の位置でセットしやすくしました。スキーグローブをしたまま調整しやすいような工夫もしました。



北京パラリンピック、ボート競技の監督、選手等と

切実なニーズがあって “マタニティ・ソケット”が 誕生した

— あ、マタニティ用の義足もあると聞きました。

15年ほど前に僕が考え出して、“マタニティ・ソケット”と名付けました。膝から上に腫瘍ができると股関節の部分で切断することが多いのです。その場合、腹囲に硬いコルセットのようなものを巻き、義足はそこにバンドで留めます。すると妊娠してお腹が大きくなるとコルセットが入らなくなりますから、6カ月目ぐらいのタイミングで義足を装着できなくなるわけです。義足を外して生活すると、両手で松葉杖をつかなければいけない。すると荷物も持てず、買い物にも行けない。でも親をあてにできる状況ではなく、出産ギリギリまで自立して過ごしたいという切実な訴えがきっかけでした。

初の試みでしたが、材料を変え、ふくらむお腹の大きさに合わせて調節できるコルセットを考えました。学会でも発表したんですよ。

— そういう需要というのは、男性ではなかなか気づかない視点ですね。

そうなんです。他にミニスカートが履きたいという女の子のために、できるだけリアルな脚に見える“リアルコスメチック義足”なんていうのもつくりました。

— いやあ、奥が深いし、アイデアや閃きも要求される仕事ですね。



関東大会女子

— 各競技の特性を把握していないとつくれませんね。

選手と密にコミュニケーションをとりますよ。競技場に向かうところからシミュレーションしていきます。車で行くとしたら装具をどう積んで行くのか。どこで履き替えるのか。例えばスキーならゲレンデか更衣室か、そこからいろいろ質問していきます。「このシーンではこういう義足があればいいね」「このシーンではこういう義足が必要になるね」と想像力をたくましくしながら、相談します。

— ふむ、競技そのものの動きだけではなく、競技の前後でどうやって車いすや義足を使っているのかも重要な情報なのですね。

スイムとバイクとランの3つをこなすトライアスロンなどはとくに大変ですね。スイムとバイクの関係だけでも、スイムのスタートまでどう行くのか。泳いで帰ってきたとき義足は誰が持って待っているのか。自転車があるところまでの距離はどうやって行くのか。誰かがおぶるのか、松葉杖を使うのか。

アスリートとしてできるだけ人の世話にならず自立して競技することを考えると、意外なところに器具が必要になります。イメージーションとディスカッションも大事ですね。

— 製作に取りかかる前に、たくさんのプロセスがあるのですね。

義足の費用は厚生労働省が補助している

— ちなみに、義足のお値段はどうなっているのでしょうか。

補装具費支給制度というのがありまして、厚生労働省が毎年、補装具基準額を決めています。各メーカーや問屋さんが輸入したり日本で製作した膝や脚の部品等、値段を記入して申告したものを厚生労働省が一つずつチェックして算定します。それが冊子になっていて、下腿義足は部品によって幅がありますが、25万から40万円の間。大腿義足だと40万から80万円程度。スポーツ用ではカーボン製などはさらに高価になります。

— それは皆さん、自己負担ですか。

厚労省の価格表に載っているものであれば、自立支援法で補助されるので、1割負担です。かつ上限があって3万7200円以上は払わなくていいので、悪くはないですね。例えば35万円の義足であれば、1割負担で3万5000円ですね。40万円の義足なら1割負担は4万円ですが、3万7200円でよい、ということになります。



厚生労働省内にて

スポーツ用義足は認可されず自己負担

— スポーツ用義足についても、その補助は同じですか。

いや、スポーツ用の義足はまだ認可されていないんです。2020年の東京パラリンピックが決まりましたから、これを機にスポーツタイプの車いすを含めて、義肢が認可されることを願っています。トップアスリート用は難しいとしても、小中学生の義務教育中の障害者がスポーツへチャレンジすることを、ある程度でも認可してほしいと思いますね。

— パラリンピックは文科省の管轄になることが決まっています。その先にはスポーツ庁も設立されるでしょう。そうなると、何か好転していくことは考えられるでしょうか。

うーん、義肢の支給の管轄は厚労省のままだろうと思われれます。障害者スポーツの強化費用や運営費は文科省になるんでしょうね。ですから双方で、2020年の先も見据えて、今までカバーされていなかった機器にも理解を示してほしいという希望はあります。

ヨーロッパでは既にやっている国もあるので、アジアでは日本がその先頭に立って見本になっていけるといいですね。

— 第一人者の臼井さんに向かって失礼かもしれませんが、日本の義肢・装具のレベルは世界的に見てどうですか。

技術レベルは高いと思っています。ただドイツなどは歴史もあるし、医療機器や支給体系はもっと進んでいますね。

— 臼井さんは、2000年シドニー大会、2004年アテネ大会、2008年北京大会に続いて、ロンドンパラリンピックでも日本代表選手団の公式メカニックとして現地に行かれていたんですね。

はい。イギリスはロンドンオリンピック・パラリンピックを契機に、かなり頑張って国を挙げて支援するようになっていましたね。

障害者福祉は満遍なく

— 海外の状況と比較して、日本の障害者スポーツについてご意見や感想はありますか。

10月にマレーシアでアジアユースパラ競技大会があったんですが、そこで、日本の障害者スポーツの良さを実感しました。

— というと？

日本代表選手団は満遍なく各種目に出場していました。ところが他国の場合、2種目程度しか出ていないところも多くある。砲丸投げだけとかパワー種目ばかりとか。車いすも義足も不足している国がたくさんあるんです。裏を返せば、それはつまり、日本の障害者福祉は幅広く行き届いているということを意味しているのだなと思いました。

— うん、なるほど。

日本は、アジアで手本となってリーダーシップをとれる国だなと。そう考えると、僕も選手に「もっと頑張ればメダル取れるよ」などと発破をかけますが、本当は別に金メダルにこだわらなくても、あらゆる種目に出場して入賞するほうが「豊かな国」といえるのではないかと感じるようになりました。

反対に、一つ気になったこともありました。障害のある小・中学生に「スポーツをやってみませんか」と学校に募集をかけても、なかなか集まらないのです。

— 希望者がいないのではなく？

どうも違うようです。学校に問い合わせをすると、個人情報のかみもあって、「障害を持った子どもにスポーツをさせてケガをしたらどうするんだ」といった反応なんです。2020年の東京パラリンピックを見据えると、今の中学生あたりから本格的にトレーニングを始めてほしいんですが、当の子どもたちにその情報が伝わらない。今は特別支援学校となっていますが、以前で言えば盲学校やろう学校の先生たち一人ひとりに、もう少しスポーツへの理解を深めてもらいたいものです。

— 子どもたちのチャンスを大人が奪ってしまうのでは、もったいないですものね。

そうなんです。「ジャパンパラ大会」というのがありまして、陸上や水泳など土日に行われているのですが、できれば近隣の学校に総合学習の一環として見学に来てもらいたい。健常の子どもたちにとっても、それは何かしら啓蒙になるはずなんです。



アジアパラリンピック選手村にて、佐藤真海選手等と

2020年東京オリンピック・パラリンピックで日本人の総合力を見せたい

— 2020年のお話が出ましたが、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決まりましたが、その意義についてどのようにとらえていらっしゃいますか。

日本は島国ですから、助け合いという相互扶助の精神が国民の中に根づいています。例えば、自国の応援だけに偏るのではなく、他国の選手もフェアに応援できる寛容さがありますよね。それは日本人が長い時間をかけて培ってきた精神・魂だと思うんですが、それをより強める機会であり、いつか世界の模範になる気がしています。経済や産業も、そういった国民性によってより成熟し発展してきたのではないのでしょうか。

日本人の“総合力”を結集してオリンピック・パラリンピックを成功させ、その力を世界に示していくことができればと思いますね。



開催決定を祝うイベント(都庁前)

— パラリンピック成功のためには、日本障害者スポーツ協会の在り方もより重要になってくると思いますが。

たくさんある各競技団体の取りまとめをしなければならない立場ですよね。ときどき伺うのですが、ちょっと人手が少ないのではないかと思うことはあります。もう少し余裕を持ってキメの細かい対応ができるよう、マンパワーが強化されるといいですね。

新たなナショナルトレーニングセンターを

— 障害者のスポーツ施設についてはいかがですか。

東京には、障害者のスポーツセンターは2カ所あります。ところが、まだ5割近い県ではそういう施設すらない有様です。つまり障害を持つ人が相談したくても気軽に相談できる場がないんですよね。ネット社会になったとはいえ、全員がネットを使えるわけではありませんし、地域の人のつながりは大切です。障害者にとって“核”となる拠点が各県に一つは欲しいですね。

— 国の支援体制の強化が望めますね。ナショナルトレーニングセンター（NTC）についてはどうでしょうか。

東京都北区にあるナショナルトレーニングセンターは、日本障害者陸上競技連盟が強化練習で使わせていただけるようになり、徐々に門戸が開かれてきています。ただやはり国の機関なので、手続きの煩雑さや利用のしづらさがあります。といって、誰でも気軽に利用できるようなシステムになるとすぐ満員になってしまいますね。できればもう1カ所、大阪あたりにできるといいですね。



NTC合宿風景

—それは健常者・障害者を含めた施設ということですか。

交流ができるという点で、僕はそのほうがいいと思います。グラウンドで健常者と車いすの人との接触事故といったこともあるかもしれませんが、そこは車いすの人用のコースを決めるとか、横切らないで済むアクセスを用意するとか、ルールを決めて互いに理解を深めればいいと思うんです。

—そうして触れ合うことで、お互いに知らないことを学び合う場になるわけですね。

医・科学サポートの 更なる充実を

—他に何か要望はありませんか。

練習環境の延長で言うと、例えば陸上競技で、義足の強化練習があります。以前は2泊3日の合宿1回だったのが、去年は1週間になりました。予算が少し増額になっているのかもしれない。

そうは言っても、遠地からの移動を考えると、もう少し合宿期間を長くしたいんです。そうなると今度は、参加者の会社の休みが取れるのかという問題も出てきます。そのあたり、国や協会のほうから休暇の許可の根回し等していただけるとありがたいですね。

—職場や学校の理解がより得やすくなりますね。

それから、パラリンピアンって日々のトレーニングのほか、健康管理が結構大変なんです。脊椎損傷の人は体のバランスを崩しやすい。義足の人は健足（残されたほうの足）に負担が行きやすいので、丁寧にそれらのケアをしなければなりません。

トレセンや障害者スポーツセンターの数がもう少し増えたり、トレーナーの数が増え、医療面で医・科学サポートをもっと手厚く受けられるようになるといいと思っています。

—大分充実してきたのかなと思っていましたが、貴重な現場の声ですね。お忙しい毎日だとは思いますが、ますますのご活躍を期待しております。きょうはどうもありがとうございました。

仲間と



義肢装具サポートセンター：鉄道弘済会の歴史

1932
昭和7

国鉄の職域福祉事業を目的として財団法人鉄道弘済会を設立
東京駅乗車口、降車口、上野駅汽車口、電車口の10箇所です店営業を開始

1944
昭和19

「東京義肢修理所」開設
本部を東京都下谷区に移転

1945 第二次世界大戦が終戦

1947
昭和22

「東京義肢修理所」を「東京義肢製作所」と改称

1947 日本国憲法が施行

1948
昭和23

生活保護法により支給する義肢の製作・修理業務を東京都等から受託

1949
昭和24

一般を対象とする福祉事業をも行うことに事業目的を改正

1950
昭和25

国鉄旅行者の援護を目的に、旅行者保護相談所（現旅行者援護所）を大阪駅構内に開設

1950 朝鮮戦争が勃発

1951
昭和26

「東京義肢製作所」を「東京義肢装具製作所」と改称

1951 安全保障条約を締結

1952
昭和27

国鉄関係者等を対象とした、ケースワーク等による援助を行う福祉所25箇所を開設
「国鉄義肢研究所」を日本国有鉄道より受託

1953
昭和28

千葉県山武郡日向村に知的障害者施設「日向弘済学園」を開設

1954
昭和29

「東京義肢装具製作所」を東京都目黒区に移転

1955
昭和30

社会福祉法人「東京弘済園」を設立

1955 臼井二美男氏、群馬県に生まれる

1955 日本の高度経済成長の開始

1956
昭和31

養護老人ホームを東京三鷹市に開設。以後、軽費老人ホームを増設

1959
昭和34

「東京身体障害者更生指導所」を東京都新宿区に開設

1960
昭和35

国際ストーク・マンデビル大会委員会 (ISMGC) 設立
ローマでパラリンピックの先駆けとなる国際ストーク・マンデビル大会（世界車いす・切断者競技大会）開催

1963
昭和38

知的障害者福祉事業の一環として東京品川区に「アフターケアセンター」を開設

1964
昭和39

東京五輪、国際身体障害者スポーツ大会開催

1964 東海道新幹線が開業

1965
昭和40

福祉センター「弘済会館」を東京都千代田区に設立し、本部を弘済会館に移転

1969
昭和44

「東京身体障害者更生指導所」と「東京義肢装具製作所」及び「東京義肢研究所」を統合し、身体障害者リハビリテーション施設「東京身体障害者福祉センター」を東京新宿区に開設

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1972
昭和47

知的障害者施設「日向弘済学園」を神奈川県秦野市に移転。総合福祉センター「弘済学園」として開設

1973
昭和48

駅売店の愛称を鉄道弘済会売店からKiosk（キヨスク）と制定

1973 オイルショックが始まる

1976 ロッキード事件が表面化

1978 日中平和友好条約を調印

1982 東北、上越新幹線が開業

1983 臼井二美男氏、鉄道弘済会・東京身体障害者福祉センターに就職

1984
昭和59

社会福祉法人「東京弘済園」を拡充。特別養護老人ホーム、老人ケアセンターを増設

1984 香港が中国に返還される

1987
昭和62

収益事業部門であるキヨスク事業の大部分を6つの株式会社に分離・独立させる

1988
昭和63

国際調整委員会 (ICC) 主催により、ソウルパラリンピック開催
日本選手141名参加。金メダル17個、銀メダル12個、銅メダル17個獲得

義肢装具サポートセンター：鉄道弘済会の歴史

1989
平成元年

旅行者援護事業の一環として「上野駅旅行者救急・援護サービスセンター」を開設

国際パラリンピック委員会創設

1989 白井二美男氏、スポーツ義足の制作を開始

1991 白井二美男氏、陸上クラブ：ヘルスエンジェルスを創設

1992
平成4

バルセロナパラリンピック開催
日本選手75名参加。金メダル8個、銀メダル7個、銅メダル15個獲得

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996
平成8

アトランタパラリンピック開催
日本選手81名参加。金メダル14個、銀メダル10個、銅メダル13個獲得

1999
平成11

総合福祉センター「弘済学園」に自閉症児施設（第二児童寮）を開設

日本パラリンピック委員会創設

2000
平成12

シドニーパラリンピック開催
日本人選手名参加。メダル13個、銀メダル17個、銅メダル11個獲得。

2000 白井二美男氏、シドニーパラリンピック日本選手団のメカニックを担当

2004
平成16

埼玉県戸田市に「戸田駅前保育所」を開設

アテネパラリンピック開催
日本選手163名参加。金メダル17個、銀メダル15個、銅メダル20個獲得。

2004 白井二美男氏、アテネパラリンピック日本選手団のメカニックを担当

2005
平成17

埼玉県さいたま市に「与野本町駅前保育所」「与野本町駅前デイサービスセンター」を開設

2008
平成20

社会福祉法人「東京弘済園」にケアハウス「弘陽園」と弘済保育所（おひさま保育園）を開設
東京身体障害者福祉センターを東京都荒川区に移転。「義肢装具サポートセンター」に改称

北京パラリンピック開催
日本選手162名参加。金メダル5個、銀メダル14個、銅メダル8個獲得。

2008 白井二美男氏、北京パラリンピック日本選手団のメカニックを担当

2008 リーマンショックが起こる

2011
平成23

東京都荒川区に「南千住駅前保育所」を開設
総合福祉センター「弘済学園」において児童デイサービス事業、放課後支援事業を開始

2012
平成24

ロンドンパラリンピック開催
日本選手134名参加。金メダル5個、銀メダル5個、銅メダル6個獲得。

2012 白井二美男氏、ロンドンパラリンピック日本選手団のメカニックを担当

2013
平成25

公益財団法人へ移行

臼井 二美男 (うすい・ふみお)

1955年群馬県生まれ。義肢研究員・義肢装具士。83年より財団法人鉄道弘済会・東京身体障害者福祉センター勤務。89年スポーツ義足の制作を始め、91年に切断障害者の陸上クラブ「ヘルスエンジェルス」を創設。2000年シドニー大会より日本選手団のメカニックを担当。

西田 善夫 (にしだ・よしお)

1936年生まれ。スポーツ評論家、元NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員。64年の東京大会以来オリンピック10大会で実況、5大会で解説・キャスターを務める。98年から02年まで横浜国際総合競技場初代場長。著書に『オリンピックと放送』（丸善）ほか。

山本 尚子 (やまもと・なおこ)

東京都生まれ。スポーツライター、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事。スポーツビジネス・シンクタンク勤務を経てフリーとなり、スポーツを中心に執筆活動を行う。『パラリンピックがくれた贈り物』など著書・共著多数。

フォート・キシモト (写真提供)

半世紀にわたり、オリンピック、FIFAワールドカップ、世界陸上などの世界のビッグイベントから市民スポーツに至るまで、幅広くスポーツの写真取材活動を継続して行っている世界的なフォト・エージェント。

企画制作 公益財団法人 笹川スポーツ財団

後援 文部科学省、東京都、公益財団法人 日本体育協会、公益財団法人 日本オリンピック委員会、
特定非営利活動法人 日本オリンピックズ協会、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会

メディア協力 (株)共同通信社、サンケイスポーツ

特別協力 (株)アシックス、(株)伊藤園、(株)JTB